

# 近代中国「間島」地域のキリスト教

## Christianity in “Kando” in Early 20th Century

倉田 明子  
KURATA AKIKO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

### キーワード

「間島」 キリスト教 日高丙子郎

### Keywords

Kando; Christianity; Heishiro Hidaka

原稿受理日：2020.1.21.

*Quadrante*, No.22 (2020), pp.25-33.

### 目次

はじめに

#### 1. 「間島」地域におけるキリスト教

##### 1-1. プロテスタント

##### 1-2. カトリック

#### 2. 光明会からみる「間島」地域の宗教事情

##### 2-1. 光明会による永新学校接收事件について

##### 2-2. 「宗教者」としての日高丙子郎

##### 2-3. 間島の光明会

##### 2-4. 永新学校事件からみる満洲事変前夜の

「間島」

おわりに

### はじめに

「満洲国」における民族について考える際、朝鮮半島から渡ってきた人々をどう位置づけるかということは、極めて重要で、複雑な問題である。もともと、朝鮮半島と隣接する中国東北部の間の人的往来はさかんであったが、日本の植民地とされた朝鮮と、日本の傀儡国家として成立した「満洲国」の間で起こった人的移動は、日本による強制力をともしう移動も引き起こした。それは、朝鮮人と満洲人、漢人と

の間での摩擦を生むことにもなり、日本が敗戦によってこの地を立ち去った後も中国東北部に残った朝鮮人（中国朝鮮族）の中に禍根を残している。その朝鮮の人々が最も多く移住し、また近代を通してその帰属について朝鮮と中国の間で、また20世紀に入ってから日本との間で複雑な対立関係を生んできたのが、現在の延辺朝鮮族自治区と重なる「間島」と呼ばれた地域である。

本発表では、「間島」地域における朝鮮人、中国人、日本人の間の関係性を、キリスト教という視点から検討してみたい。キリスト教（カトリックとプロテスタント）への対処は、日本が植民地や「満洲」の統治において特に神経を使っていた分野の一つである。欧米諸国との関係上、統治領域におけるキリスト教会や宣教師の扱いに慎重にならざるをえなかった。日本がキリスト教勢力にどのように対応したか、ということは、現地の統治政策のみならず他の支配地域や対外関係にも影響を及ぼす問題であった。「間島」は、すでに朝鮮半島を植民地化した日本が、満洲への足がかりとして重視していた地域であり、満洲におけるキリスト教



政策を考える上でも参考となる事例を擁している可能性がある。

「間島」地域はその地理的、人的条件から朝鮮半島との連続性が高い地域ではあるが、「満洲」の領域内にあること、また発表者の言語的な制約もあるため、ひとまず関連する先行研究として、満洲のキリスト教に関わる研究を整理しておく。日本における研究としては、本日のコメンテーター渡辺祐子氏による、日本人クリスチャンの熱河伝道や「満洲国」におけるキリスト教政策に関わる研究がこの分野をリードしている<sup>1</sup>。また、日本で組織された満洲伝道会や、賀川豊彦によるクリスチャン移民村の建設など、日本から満洲に向けて展開された布教活動についての研究もいくつかある<sup>2</sup>。中国における研究としては徐炳三が、中国東北地域のプロテスタントの歴史をその初期から「満洲国」期まで体系的に論じている<sup>3</sup>。ただし、徐氏の研究も満洲事変以後の日本のキリスト教政策の分析に重点があり、既存の欧米の伝道会の歴史や満洲事変前後の連続性などについては概括的な分析にとどまっている。また、延辺地域に焦点を当てたキリスト教史研究は、管見の限り見当たらない。

一方資料面では、外務省資料や「満洲国」期に行われた満鉄などによる調査資料がかなり残されている。また特にカトリックに関しては1935～1941年にかけてパリ外国宣教会が「満洲国」で刊行していた『満洲公教月刊』が近年復刻されたほか、日本語による当時の

関連書籍も複数あり、比較的調査がしやすくなっている<sup>4</sup>。

## 1. 「間島」地域におけるキリスト教

### 1-1. プロテスタント

徐氏は延辺地域のプロテスタント教会の歴史を、「朝鮮から来た教派」としてまとめている<sup>5</sup>。現状ではこれが最も包括的な記述となるので、以下では徐氏の整理に従って概観しておきたい。なお、プロテスタントの場合、後述するカトリックとは異なり、基本的に各教派はそれぞれ独自に海外伝道を行う。

「朝鮮から来た教派」の第一は朝鮮キリスト教長老教会（1912年に朝鮮の7つの長老教会が連合）で、そのうち平北長老教会が「間島」地域を管轄した。また、「同年〔1912年〕カナダ長老教会も延吉一帯に宣教師を派遣し、龍井に拠点を置いた。1921年に各教会の代表が平北教会からの離脱を宣言し、間島教会を設立した。1925年に東満長老教会と改称。朝鮮人伝道者が延吉、盛京、通化、臨江、瀋陽などで伝道した。1939年、東北朝鮮耶穌教長老会連合会が設立され、メソジスト派、清潔会、朝鮮安息日会が長老教会の旗下に入った。1942年、『満洲朝鮮族基督教総会』が設立され、朝鮮との関係を絶った」。

第二は朝鮮キリスト教メソジスト教会である。「1908年にアメリカ南部メソジスト教会の朝鮮年会が龍井一帯に伝道者を派遣し、教会を設立。1910年アメリカ北部メソジスト教会の

<sup>1</sup> 関連する主な研究として以下の4点を挙げておく。渡辺祐子「満洲国」における教会合同について、『富坂キリスト教センター紀要』9号、2019年3月、pp.79-90。同「満洲国」における宗教統制とキリスト教、『明治学院大学キリスト教研究所紀要』51号、2019年1月、pp.293-323。同「キリスト教教育の自由と国民道徳：満洲国における孔子祭参拝強制をめぐって」、『富坂キリスト教センター紀要』7号、2017年3月、pp.135-144。渡辺祐子ほか『日本の植民地支配と「熱河宣教」』（21世紀ブックレット46）、いのちのことば社、2011年。

<sup>2</sup> 韓哲曦『日本の満洲支配と満洲伝道会』日本基督教団出版局、1999年。賀川豊彦記念松沢資料館『満洲基督教開拓村と賀川豊彦』（賀川資料館ブックレット）、賀川豊彦記念松沢資料館、2007年。倉橋正直「満洲キリスト教開拓団（特集「日中戦争期の外地における日本の宗教活動」について）」、『東アジア研究』48号、大阪経済法科大学アジア研究所、2007年、pp.19-31。また、カトリックのパリ外国宣教会の満洲における活動についての研究としては、以下のものがある。Thompson, Mícheál, “Choosing among the Long Spoons: The MEP, The Catholic Church and Manchuria: 1900-1940”, *Comparative Culture*（『比較文化』宮崎国際大学国際教養学部紀要）, Vol.14, 2008, pp.71-92.

<sup>3</sup> 徐炳三『“扭曲”的十字架：偽満洲国基督教研究』科学出版社、2018年。

<sup>4</sup> 徐炳三編『満洲公教月刊』（影印本）全6冊、広西師範大学出版社、2013年。『満洲に於ける天主教』（観光叢書第4輯）、満鉄鉄道総局営業局旅客課、1939年など。

<sup>5</sup> 徐炳三『“扭曲”的十字架』、p.39。

朝鮮年会の牧師が伝道にやってくる。1920年、アメリカメソジスト教会間島地方宣教年会が設立される。「1930年に中国東北部のメソジスト教会は『メソジスト満洲宣教年会』に合併された」。

第三は東亜キリスト教会である。大韓キリスト教会から分かれ出た一派で「1906年、韓永泰らが延吉大母鹿溝に入り、現地の朝鮮人住民に伝道し」、その後、満洲各地に展開した。

第四は清潔会で、アメリカメソジスト教会の信徒が日本で設立した伝道団体である。1907年にソウルに伝道館を作り、中国東北部にも進出、1926年に龍井に教会が設立された。

このほかに、セブンスデー・アドベンティスト教会（復臨安息日会）も延辺地区で伝道しており、中国で誕生した教派である耶穌家庭も安図県明月鎮に教会があった<sup>6</sup>。

以上が間島地域におけるプロテスタントの概要である。この地域においては長老教会とメソジスト教会が比較的初期から伝道活動を展開していたことが見て取れる。

表1は1923年と1925年に間島日本総領事館で行われた宗教調査の記録に基づく間島地域のプロテスタント諸教派の情勢である<sup>7</sup>。

一つ興味深いのは、1923年の調査記録に登場する外国人宣教師はカナダ長老教会所属のイギリス人宣教師一名のみで、同会の60

ある教会のほぼ全てが朝鮮人牧師または長老によって運営されていることである。それ以外の教派には朝鮮人、中国人以外の教職者は一人もいない。さらに1925年の調査記録になると、カナダ長老教会にいた外国人宣教師の名前も見当たらないのである。間島地域においては、朝鮮人教会リーダーの指導力が確立していたとみることができるのかもしれない。

## 1-2. カトリック

次に、「間島」地域におけるカトリックの歴史を見ておこう。カトリックでは、教会と信徒はその地域を管轄する教区に属する。教区はローマ教皇庁から任命される司教が管轄しており、いくつかの教区を管轄する大司教区が設置される場合もある。新しく伝道活動を始めるとき、ローマ教皇庁から許可を得た修道会がその地域での伝道を行い、教会が形成され信徒が増えていけば、段階を踏んでその地域に教区が設置される。教区には司教座堂と呼ばれるメインの教会堂が置かれ、教区長となる司祭がローマ教皇庁から任命される。

間島に最初にカトリックが入ってきた時期はあまりはっきりしない。ただし『満洲公教月刊』2巻11期（1936年）には「天主教間島伝来四十周年記念慶祝大会」<sup>8</sup>という記事があり、1936年8月に間島地域へのカトリック伝

【表1】

		1923 年	1925 年
カナダ長老教会	教会数	60	61
	信徒数	8,091	6,263
南部メソジスト教会	教会数	8	14
	信徒数	810	1,513
東亜キリスト教会	教会数	8	7
	信徒数	439	266
安息日会	教会数	2	2
	信徒数	164	164
スコットランド長老教会	教会数	2	--
	信徒数	61	--

<sup>6</sup> 同上、p.38。

<sup>7</sup> 外務省記録『間島琿春地方宗教調査表』、『間島琿春地方朝鮮人宗教調査ノ件』。アジア歴史資料センターのウェブサイトで閲覧可。

<sup>8</sup> 徐炳三編『満洲公教月刊』第2冊、pp.632-633。



【表 2】

		1923 年	1925 年
カトリック教会	教会数	24	32
	信徒数	4,859	9,320

来40周年が盛大に祝われたことが報じられている。また張太賢「延吉の天主教と劉裕庭」<sup>9</sup>では、「1900年以降朝鮮から移民たちが大挙して北間島にやって来たのにもない」延辺にカトリックが伝わったとされている。1900年前後にこの地域に入ってきた朝鮮人移民たちとともにカトリックが伝来したと考えてよいだろう。

張氏はさらに「はじめはフランスの『パリ外国宣教会』の宣教師が朝鮮の元山、徳元などの地方から延辺にやってきて大拉子（元内蒙古烏蘭察布市商都県管轄の郷）、八道溝、敦化などの地域に小さな教会堂を立てた」と記す。つまりこの地域に教会を作り、布教活動を進めたのは朝鮮半島側からやって来たパリ外国宣教会の宣教師であったとされている。このあたりの経緯はまだ精査するに至っていないが、19世紀前半にローマ教皇庁から朝鮮地域と満洲地域の伝道を任されたのがパリ外国宣教会であったのは確かである。もともと中国東北部は北京教区の一部とされていたが、1838年に北京教区から満洲教区が分離し、さらに1840年には満洲教区と蒙古教区に分離した。この東北部における教区設立の際に、パリ外国宣教会にこの地域の管轄が任された。その後1898年に満洲教区は南満教区と北満教区に分かれ、さらに1924年に南満教区は奉天教区に、北満教区は吉林教区に改称した。延辺地域にカトリックが伝来した1900年前後以降、この地域は北満教区に入っていたわけだが、興味深いことに、1920年に延吉道とその北に位置する依蘭道のカトリック教会は北満教区から分離し、朝鮮の元山教区に編入されて

いる<sup>10</sup>。先の張氏の記述と併せ、これらの地域のカトリック教会が朝鮮人を主体とし、朝鮮半島と強いつながりを持ちながら拡大していたことがうかがえる。

1921年、ドイツの「聖オデルのベネディクト会」の宣教師テオドル・ブレーエル（Bishop Theodore Breher, 白化東）が、延辺地域の教会の管理を「ある朝鮮籍の司祭から」引き継いだ<sup>11</sup>。そして1928年には元山教区から分離して延吉知牧区が成立し、1937年に代牧区（知牧区は代牧区の前段階、代牧区は教区の前段階である）に昇格している<sup>12</sup>。

表2は上記表1と同じ資料をもとに作成したカトリック教会の情勢である。

カトリックの場合は1923年には5名、1925年には4名の宣教師が在住していた。

以上、延辺地域のキリスト教の展開について概観した。具体的な伝道状況についてはまだ不明な点が多いが、プロテスタントもカトリックも、まずは朝鮮人信徒がこの地域に入ってキリスト教を広め、後から宣教師や教会組織が入ってくるという経過をたどっているように見受けられる。宣教師による開拓伝道という一般的なイメージとは異なるキリスト教の伝播のあり方は、朝鮮半島へのキリスト教の伝播の歴史も彷彿とさせる。実際、この地域のキリスト教は朝鮮半島とのつながりが強い。今後この地域のキリスト教史をさらに明らかにしていくためには、中国と朝鮮両面の史料からアプローチしていく必要があるだろう。

以上のような延辺地域のキリスト教史を踏まえつつ、次節ではより具体的な事例について

<sup>9</sup> 張太賢「延吉の天主教と劉裕庭」、政協延辺朝鮮族自治州委員会・文史資料委員会編集出版『延辺文史資料』第8輯・宗教資料專輯、pp.166-171。朝鮮語の原文を朱海燕氏に和訳していただいた。ここに感謝申しあげる。

<sup>10</sup> 「天主教在満洲百年大事表（1838-1938）」、徐炳三編『満洲公教月刊』、第4冊、p.358。

<sup>11</sup> 李績勳「介紹延辺教区的延吉天主堂」、徐炳三編『満洲公教月刊』、第1冊、p.73。

<sup>12</sup> 「天主教在満洲百年大事表（1838-1938）」（続）、徐炳三編『満洲公教月刊』、第4冊、p.404。

見てゆきたい。

## 2. 光明会からみる「間島」の宗教事情

### 2-1. 光明会の永新学校接收事件について

1924年から1925年にかけて、光明会による永新学校接收問題が持ち上がった。永新学校は1911年に龍井で「有志の協議」によって建てられた学校で、その後1913年からはカナダ長老教会によって運営されていた。1920年に日本軍が間島に出兵し反日運動を弾圧する事件が起こっているが（「間島出兵」、永新学校は独立を志向する青年を輩出する反日的な学校として日本側から目を付けられていたという<sup>13</sup>。しかし1924年には飢饉の余波を受けて経営難に陥り、翌年光明会という団体に買い取られることになった。これに対して在校生や運営母体の教会から反対の声が上がり、さらに買収交渉の過程で不正があったとして逮捕者が出るなど、この事件はスキャンダルの様相を呈していく。ただ、最終的には予定通り光明会が永新学校の運営を引き継ぐことに教会も同意し、1925年9月には正式に学校とその経営権が光明会に引き渡された。

ここに登場する光明会と永新学校、また譲渡を巡るこの事件については、駐間島日本領事館の記録が外交史料館に残されており、国立公文書館アジア歴史資料センターのウェブサイトで閲覧することができる。またこれらの資料を用いた比較的新しい研究として、金珽実、許寿童がそれぞれ論文を発表している<sup>14</sup>。どちらの研究も、光明会の代表を務めた日高丙子郎について、また永新学校の譲渡を巡るトラブルの詳しい経過や、光明会に経営が移った後の永新学校の教育内容などを詳しく紹介している。なお、永新学校については金氏の論文がやや詳しく、光明会については許氏の論文のほうがやや詳しい。

日高丙子郎は参謀本部の嘱託として1906年から鉄嶺で、翌1907年からは間島で勤務していた人物で、朝鮮総督府から機密費を受け取ることもあったようだ。1921年に宗教団体である光明会を設立し、教育機関を経営し始めた。教育を通して「朝鮮人の帰順工作」に携わっていたとも言われる。しかも光明会に対しては朝鮮総督府や外務省が相当支援をしており、「機密費」によって間島総領事館から継続的に補助金が出ていた。こうした経緯から先行研究では、日高丙子郎と光明会は日本政府と特別な関係を持ち、日本による侵略の一翼を担いつつ朝鮮人同化政策を行った、と批判的に評価されている。

光明会と永新学校に関する資料は、間島総領事館が収集した当時の新聞の切り抜きなども含めてかなり整備された形で残り、しかも公開されているため、本発表では先行研究で扱われたような基本的な事実関係や、教育史的な観点からの永新学校についての分析を繰り返すことはしない。以下では、先行研究があまり注目してこなかった光明会の宗教的背景に着目し、キリスト教を含む当時の間島地域の宗教事情と社会情勢を考えてみたい。

### 2-2. 「宗教者」としての日高丙子郎

光明会代表の日高丙子郎について、金氏も許氏も彼の経歴を紹介する中で、日高が大陸に渡る前に「日本国教大道社」に入社し、その機関紙の編集に携わっていたことを指摘している。また、大道社が神道、儒教、仏教を一つにした宗教であり、日高がその創始者の一人である鳥尾小弥太から強い影響を受けていることも指摘している。さらに金氏は、日高は山崎弁栄が創始した光明会にも入信しており、そこから間島における光明会の活動が始まっていることにも言及している。ただ、日高の宗

<sup>13</sup> 金珽実「間島における日本人個人経営の永新学校について」『地域文化研究』(3)、2005年、p.60。

<sup>14</sup> 金珽実「間島における日本人個人経営の永新学校について」、pp.53-74。許寿童「間島光明会と永新中学校」『満洲研究』8、満洲学会、2008年、pp.87-115。許氏の論文については飯倉江里衣氏にPDF版をご提供いただいた。ここに感謝申しあげる。

教的背景に関してはこれ以上立ち入った検討はなされておらず、日高の宗教思想と実際の活動の関わりにはあまり注意が払われていない。また、永新学校についても、それがキリスト教系の学校であることには言及されているが、その運営母体であったカナダ長老教会側の動きについては、あくまで間島総領事館が把握していた情報に基づいた記述となっている。結果的にこの事件の宗教的側面が見えにくくなっているようにも思える。

現状において筆者は本事件を巡る宗教的な側面について詳細な研究を進めることはまだできていないが、本発表ではひとまず、日高の宗教思想の特徴に着目し、宗教的側面からこの問題を考えた時に見えてくる新たな議論の可能性を提示できればと考えている。

日高が最初に入信した「日本国教大道社」は、川合清丸や鳥尾小弥太（陸軍中將。西南戦争などに従軍）らが創設した団体で、「国教」を宣揚し、日本人をこれに帰依させることを目的としている<sup>15</sup>。川合清丸著『日本国教大道社設立主意』の冒頭には以下のようにある。

国教は国の精神なり。我国の精神は神儒仏の三道なり。三道合して大道と謂ふ。君に忠し国を愛するは神道より善きは無し。世道を経綸するは儒道より善きは無し。煩惱を解脱するは仏道より善きは無し。昔先王此の三道を調和して、以て国教と定め玉ふや旧し。

このように神道、儒教、仏教を混合して日本の「国教」として設定し直したのが「国教大道」であった。この主意書には、この「国家の精神」をかき乱し、「外国の教法を以て我国の精神

に入れ代んとする者」があるという危機感のもと、「大日本帝国を千万世に維持せんとらば、謹で先王の制作を尊奉して以て国家の精神を結合せざるべからず」とも記されている<sup>16</sup>。明治前半の西洋化を伴う急激な近代化の流れの中で、「大日本帝国」の精神を神道のみならず儒教と仏教にも求めた点が目を引く。こうした混合宗教的な「国教」が日本において主流の地位を占めることはなかったが、国家主義的な色彩を帯びつつ、儒教と仏教を肯定的に捉える思想は、朝鮮半島から大陸へと進出しようとする人々にとっては好都合だったはずである。20代で大道社に入り機関紙『大道叢報』の編集に携わっていたという日高丙子郎が、参謀本部の嘱託で大陸に渡り、間島に定住したのは、大道社の思想が日本の大陸政策に役立つ可能性があるかと軍部が判断したからではないだろうか。

他方で日高丙子郎は1919年には光明会にも入信している<sup>17</sup>。光明会（光明主義）は浄土宗の僧侶だった山崎弁栄が創始した、仏教に源流を持つ新宗教ともいべき教えである。光明会や山崎についてはほとんど知られていないが、山崎弁栄に関する先行研究を整理した鶴澤潔は、光明主義運動が浄土宗の異端として扱われ、浄土宗側からは研究されてこなかったこと、また新宗教研究の対象からも外れてきたことを指摘している<sup>18</sup>。

山崎が記した「光明会趣意書」の冒頭には次のようにある<sup>19</sup>。

この教団は如来てふ唯一の大御親を信じ、其慈悲と智慧との心的光明を獲得し、精神的に現世を通じて永遠の光明に入るの教団なり。

<sup>15</sup> 川合清丸『日本国教大道社設立主意』大道社、1891年、p.4。国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可。

<sup>16</sup> 川合清丸「大道論」、p.3（同『日本国教大道社設立主意』所収）。

<sup>17</sup> 金斑実「間島における日本人個人経営の永新学校について」、p.56。

<sup>18</sup> 鶴澤潔「山崎弁栄と光明主義運動——その生涯史と先行研究の検討」、『倫理学』14号、1997年12月、p.109。

<sup>19</sup> 山崎弁栄「光明会趣意書」、同『弁栄聖人遺稿要集 人生の帰趣』1923年、ミオヤのひかり社、p.518。国会図書館デジタルコレクションで閲覧可。



其大御親とは宇宙唯一の霊体にて心靈界の大日輪なり。明治天皇の「朝な夕な御親の神に祈るなり我が国民を守り玉へ」と「目に見えぬ神のところに通うこそ人の心の誠なりけれ」との御製は畏くも其御消息と拝し上らる。また孔夫子が天道と呼玉ひしも同じ唯一の大御親の別号に外ならずと信ず。

この宗教も明治天皇が祀る「御親の神」と孔子が「天道」と呼ぶものが、彼らが奉じるところの「如来」=「大御親」と同じであるとしており、大道社の信仰と似た混合宗教の色彩を帯びていることが分かる。山崎弁栄が明確に光明主義を唱え始めたのは1913年、「光明会趣意書」が記されたのはその翌年であった。1917年6月、山崎は朝鮮と満洲で布教の旅をしているが、満洲で訪問したのは大連、旅順、奉天、撫順の各都市で、間島に立ち寄った形跡はない<sup>20</sup>。その2年後の1919年の大晦日に、山崎が住職をしていた相模原市当麻の無量光寺を日高が訪れた。数日間滞在するうちに、山崎の教えを受けて日高がそれまでの禅の信奉者から「念仏行者」になった様子が、山崎の伝記には記されている<sup>21</sup>。そして1920年の間島出兵を挟んで翌1921年の10月、日高は間島で光明会を発足させるのである。

### 2-3. 間島の光明会

ところで、設立の認可を得るために間島総領事館に提出された「光明会趣意書」は、山崎弁栄が書いたものとは全く別のオリジナルな文書である。その冒頭と末尾はそれぞれ以下のようになっている<sup>22</sup>。

宇宙ノ独尊万物ノ帰軸ニシテ霊肉ヲ統摂シ給フ真宰ノ上帝、天主、如来、神等ト

称シ来レル絶対ノ大霊体ヲバ真宰ノ聖名ヲ以テ崇頌シ奉ル。大智大能ハ何レノ時、處、物ニモ充滿シテ不斷ニ無量ノ恩寵ヲ垂レ給フコトヲ省覺シ、赤子ノ慈母ヲ慕フ如ク、吾等ノ大みおやタル真宰ヲ遣ル瀬無キ心ニ恋ヒ縋リ、日月ニモ軼ギテ光輝燦爛タル光明ノ大威神力ヲ各自ノ霊台ニ受ケ入レ、罪惡ノ暗黒ヲ払ヒテ淨潔円満ノ心身ト成リ、無限ノ平和、無辺ノ幸福ヲ人間ヨリ拡メテ一切万物ト共ニ享受シヨウトスルノガ光明主義ノ宗旨デアリマス。……

古ニ曰ク、一家仁ナレバ一國仁ニ興リ、一家讓ナレバ一國讓ニ興ル。國ヲ治メ天下ヲ平ニスルハ一ニ皆ナ身ヲ修ムルヲ以テ本トス、ト。故ニ一人ズツニテモ同信同感ノ人士ヲ糾合シー事ツツニテモ人世ノ罪惡ヲ消除センコトヲ希フ。……此ノ主義ヲ万邦ニ宣傳普及スルニ先チ多年權變ノ淵藪紛擾ノ巷衢ト目セラレシ間島ニ平和幸福ノ樂園ヲ現成シ東亜ノ垂留布スタル長白山上に焦天ノ靈火ヲ掲ゲ大光明ヲ將ツテ世界ノ幽闇ヲ照破センコトヲ祈願致シマス。謹デ大方諸君子ノ贊助ヲ冀フ。  
(傍線：筆者)

「大みおや」や「光明主義」という言葉はあるものの、山崎弁栄の思想の核心であった仏教の色彩がほとんどなくなっており、代わりに儒学の經典である『大学』の一節が引用されていることが目を引く。また「大みおや」の呼称として「上帝、天主」が挙がり、しかも如来よりも先に置かれていることも見逃せない。「上帝」と「天主」は漢語におけるキリスト教の神の訳語（前者はプロテスタント、後者はカトリック）だからである。

<sup>20</sup> ミオヤのひかり社編『日本の光：弁栄上人伝』、ミオヤのひかり社、1936年、p.446。

<sup>21</sup> 同上、pp.537-539。

<sup>22</sup> 「光明会趣意書」、外務省記録『光明学園関係一件』(2)。アジア歴史資料センターのウェブサイトで見覧可。

許氏が指摘しているように、間島の光明会の発起人には抗日独立運動のリーダーであった金躍淵が名を連ねていた<sup>23</sup>。金躍淵は1900年前後に家族で龍井の明洞に移住し、そこに小さな家塾を開いた。これが後に明東書塾、さらに明東学校となる。1909年に教師として招いた鄭載冕に導かれて金躍淵はクリスチャンになり、明東学校もキリスト教教育を行うようになった。1920年の間島出兵事件の際、明東学校は抗日運動の拠点と見なされ、日本軍によって校舎が焼かれている。校長である金躍淵も中国の官憲によって逮捕された。

このような経歴の金躍淵が1922年には光明会の発起人になっていることには奇異な印象も受ける。しかし許氏は、間島出兵に関わる一連の事件後、金躍淵が中国官憲と日本領事館の双方から大きな圧力を受けており、明東学校再開の認可を得るために恭順の意を示すことを余儀なくされていたと指摘している<sup>24</sup>。金躍淵が光明会の発起人になったのも、どこまで彼の意思に沿った選択だったのかはよく分からない。ただ、光明会の趣意書を見る限り、この会が間島の緊迫した情勢の緩和を一つの目的として作られた組織であり、「日満鮮」の融和を演出するためのものであったことは明らかである。さらに踏み込んでいうならば、日本側が危険視し、攻撃対象としたキリスト教（学校）への取り込みないし切り崩し策として、同じ宗教という枠組みで融和を図ったのが光明会の設立だったのではないかとも思える。だからこそ、「本来の」光明主義とは異なる、「上帝、天主、如来、神」を名指しで並列し、それらを同一視するような宗教観が提示されているのではないだろうか。

## 2-4. 永新学校事件からみる満洲事変前夜の「間島」

日高丙子郎という人物が、日本の諜報員だったのか、熱心な宗教家だったのか、あるいはその両方だったのか、現段階では発表者には判断ができない。日高は光明会設立前、朝鮮の土着宗教（許氏は「親日宗教団体」と表現する）の一つ侍天教の間島での組織の長に就いていたとも言われる<sup>25</sup>。融和工作のためか、宗教家としての情熱ゆえかはともかく、日高が日本で信仰した「国教大道」や「光明主義」といった混合宗教的教えを、間島の実情に合わせて独創的に「実践」していたことは確かであろう。他方で日本の当局は、間島出兵で抗日独立派の朝鮮人たちを弾圧はしたものの、その後もこの地域に影響力を拡大していくために融和策を採る必要に直面していた。特に警戒を強めていたキリスト教に対し、宗教には宗教でという姿勢で取り込み策をはかった結果が、日高の光明会設立への支持と援助（光明会は間島総領事館を通して、経営する学校への土地や補助金などで多大な援助を受けている）だったのではないだろうか。

なお、現代から振り返ると「国教大道」や「光明主義」のような混合宗教はやや特異な印象を与えるかもしれないが、20世紀初めの中国においては混合宗教はさほど珍しいものではない。そもそも儒教、仏教、道教の「三教合一」の教義を持つ民間教派の系譜は清代以来の歴史があり、いくつかの支流（先天道、一貫道、同善社など）に分かれつつ中華民国期には中国全土、そして東南アジアの華僑社会に拡大していた。1910年代に山東省で成立し、後に「満洲国」でも比較的大きな勢力を持つことになる道院（道院の慈善団体組織が紅卍字会である）は儒教、仏教、道教にキリスト教とイスラームを加えた「五教合一」の教義を掲げる。

<sup>23</sup> 許寿童「間島光明会と永新中学校」、p.98。以下の金躍淵の経歴についてはウェブサイト Encyclopedia of Korean Culture の「김약연（金躍淵）」の項も参照した。（<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0009741>）

<sup>24</sup> 許寿童「間島光明会と永新中学校」、p.99。

<sup>25</sup> 同上、p.90。



他方、1910年代には中国や日本で伝道していた宣教師の中から、在来宗教とキリスト教の類似性を強調したり、同源説を唱える声すらあがっていた。間島の光明会が「上帝、天主、如来、神」を並列してキリスト教会にも融和を呼びかけることが可能だったのは、当時のこうした宗教的気運もある程度は関係していたであろう。

### おわりに

本発表では、まず間島におけるキリスト教の歴史を概観し、次に光明会の事例を取り上げた。いずれも初歩的な研究であり、今後さらに綿密な研究を進める必要がある。特に間島のキリスト教史に関しては、宣教師側の史料や教会の当事者に関わる朝鮮語史料なども視野に入れていく必要があるように思う。発表者自身にできることは限られているようにも思われるが、今後も関心を持っていきたい。

また今回、光明会を通して垣間見た満洲事変前夜の間島の状況についても、今後、「満洲国」における宗教統制の問題と関連づけてさらに考察していく必要があるだろう。日本当局のキリスト教に対する警戒は、「満洲国」にもそのまま引き継がれていくからである。渡辺祐子氏は「満洲国」における宗教統制（1938年に公布された「暫行寺廟及布教者取締規則」の成立過程とキリスト教会の反応）についての研究の中で、1936年に民生部の委託を受けて行われた北満地域の宗教調査において、「満洲に最も妥当な宗教の基準」に抵触する宗教としてキリスト教に強い警戒感が示されていたと指摘している<sup>26</sup>。この宗教調査を行った中央大学教授の大谷湖峯は、特に間島のカトリックとプロテスタントについて、「龍井のカトリック教会の学校が授業料を無料にして幅広く浸透しており、本来であれば統制すべきであるが

日本領事館は手を出せないこと、琿春の教会が「匪賊」を同じ人間として保護していること、行政が治安工作のために無理やり教会の使用を認めさせたところ反感を招いたことなどいくつかの懸念材料を挙げ、『当地に於いては早く宗教統制に着手し積極的に民心の動向を指導する必要がある』と述べていたという<sup>27</sup>。本発表で見てきたように、1920年の間島出兵直後から、日本の当局は日高丙子郎への「協力」や「援助」を通して間島のキリスト教会やその教育事業に対して取り込み策をはかっていた。しかし結局のところ、光明会の教育事業は想定したような成果を上げておらず、永新学校の経営もあまりうまくはいかなかったようだ<sup>28</sup>。宗教には宗教で、というある意味温和な宗教政策は失敗に終わったと言えるだろう。そうした間島での試行錯誤の延長線上に、「満洲国」における孔子崇拝の強要に始まる宗教統制策も位置づけることが可能であるかもしれないのである。

<sup>26</sup> 渡辺祐子「満洲国」における宗教統制とキリスト教、『明治学院大学キリスト教研究所紀要』51号、2019年1月、p.298。

<sup>27</sup> 同上、p.299。

<sup>28</sup> 許寿童「間島光明会と永新中学校」、pp.111-113。